総合型選抜入学試験

2026年度総合型選抜入学試験
藤女子大学文学部文化総合学科
課題レポート・サンプル（教員作成版）

課題レポート サンプル① 生類憐みの令はなぜ出されたのか

藤女子大学文学部文化総合学科　平井上総

1　はじめに

高校で使っている教科書（『詳説日本史』山川出版社）によると、江戸幕府の5代将軍徳川綱吉は、仏教の思想により、1685（貞享2）年から20年余りにわたり生類憐れみの令を出し、生類すべての殺生を禁じた、とされている。この法は庶民にとって迷惑であったとされているが、そうした法がなぜ制定されたのだろうか。岡崎寛徳氏の研究をもとに、その背景を探究してみたい。

2　生類憐れみの令の概要

生類憐れみの令とは、一つの法令ではなく、綱吉が将軍だった時期に発令された法をまとめて呼んだものであり、後代につけられた名称であった。犬の保護というイメージが強いが、対象は牛馬や魚介類など幅広い。動物の遺棄や食用、狩猟、飼育などへの規制が行なわれたが、漁猟で生活している者が魚などを捕獲して販売し、庶民がそれを購入して食べることは禁止されていなかった。

生類憐れみの令は、人も対象となっている。1687年の法令には、「捨て子は届け出なくてもいたわり、養うか、養育を望む者のもとにつかわすように」とか、「犬だけではなくすべての生類への慈悲の心によって憐れむように」などと記されている（『改訂版 詳録新日本史史料集成』228ページ）。こうした法によって、動物のみならず人も多く救われたのではないかと推測されている。

3　生類憐れみの令の背景

綱吉がこの法を出した背景として、彼の幼い息子が死んだ時に、隆光という僧が戌年生まれの綱吉に犬を憐れむことを勧めたためだった、という説がある。しかし、隆光は生類憐れみの令の初発令の時期に江戸におらず、彼の日記にも生類憐れみの令に関する記述は無いため、この説は否定されている。

当時は、牛馬や幼児、老人を捨てる行為が多く行なわれており、それが生類憐れみの令の背景の一つとなっていた。また、戦国時代の荒々しい風潮が江戸時代になっても残っていたため、仏教や儒教の思想をもとにそれを一掃し、文治主義を社会に浸透させることが目的であったともされている。人も動物も救い、社会も変えていくという思想のもとに行なわれた政策であった。

綱吉の死後、6代将軍徳川家宣は生類憐れみの令を撤廃した。ただ、綱吉以前の将軍の時代から行なわれていた生類保護の政策もあり、そうしたものについては家宣も引き継ぎ、むやみな生類の殺害や遺棄を禁じた。生類憐れみの令は、以前の将軍の政策を受け継ぎ、大きく発展させた法という要素もあったのだろう。

4　おわりに

生類憐れみの令は、単なる動物愛好のための法令ではなく、人を含めた生類に対して日本社会が厳しかったという背景があり、それを変えようとする目的があった。しかし、人々の大きな不満を招き、家宣の代に多くが撤回されたのは、あまりにも過剰な政策になってしまっていたからではないだろうか。今後は、生類憐れみの令に対する人々の反応について調べてみたい。

（本文1168文字）

○参考文献

・岡崎寛徳「生類憐れみの令とその後」中澤克昭編『人と動物の日本史 2 歴史のなかの動物たち』吉川弘文館、2009年
・坂本賞三・福田豊彦・頼祺一監修『改訂版 詳録新日本史史料集成』第一学習社、2017年

①書式は自由です。このサンプルを参考に作成してください。
②制限の字数は本文が対象です。参考文献は字数に含めません。
③参考文献は、著者名・書名（記事名）・出版社名・出版年を明記してください。
雑誌であれば巻・号数、新聞であれば出版年月日、Webサイトを参照した場合はURLと閲覧日が必要です。

課題レポート サンプル② 老いのイメージとそれが高齢者に与える影響について

藤女子大学文学部文化総合学科　石井佑可子

１．はじめに

教科書（『倫理』東京書籍）には、近代にかけて老いの価値観が変化したと書かれている。具体的には、近代以降の社会が生産的な生に価値をおくようになったことで、老いても若さを失わないことが重要とされ、立身出世し名声を獲た高齢者には権力と権威が与えられる一方、そうではない多くの高齢者は居場所を狭めることになったと述べられていた。

こうした記述からは、現代において一般的な高齢者へのイメージがネガティブに偏っていると考えられる。またその影響で高齢者の生活に何らかの困難が生じうるとも推察される。そこで本レポートでは、老いへのイメージがどのようなものかや、それが高齢者にどのような影響を及ぼすのかについて探究する。

２．老い・高齢者へのイメージとその影響

パルモアは、現代社会では高齢者に対して「知能が衰えている」「孤独」「病気がち」といった固定観念が存在すると明らかにした（Palmore, 1999　鈴木訳, 2002）。岩隈（2007）によれば、こうした否定的イメージは若年者が高齢者とのコミュニケーションを避けることに繋がり、仮に会話がなされたとしても幼児に話しかけるような、過度にゆっくりかつ単純な表現で話す形態をとりやすくなる。一方、高齢者に対するポジティブなイメージも存在する。パルモアは前掲書の中で「親切」「頼りがいがある」「知恵がある」といった高齢者への肯定的固定観念についても紹介している。

また、老いに対する固定観念は高齢者自身の中にも存在し、それが心身の健康に影響することも示されている。たとえば、高齢者自身が加齢に対してネガティブなステレオタイプを抱くと慢性的なストレスをもたらして病気や認知症になりやすくなり、ポジティブなステレオタイプは反対に、余命の延長および well-being や認知機能の向上と関連することが分かっている（岩原, 2018）。

ただし岩原は、高齢者の幸福や健康を考えるにあたって、老いへのネガティブイメージを無理に改めようとする動きに対しては疑義を唱えている。彼は「普通」の加齢には障害や機能不全が必然的に伴うものなので、加齢による様々な機会や機能の喪失から目を背けるのではなく、疾患や障害があったり完全な自立ができなかったりしても、老いと共生して精神的な健康を保つよう目指すことが重要だと主張している（前掲書）。

３．まとめ

高齢者へのイメージには予想通りネガティブなものがあり、それが非高齢者との円滑なコミュニケーションを阻害している可能性もうかがい知れた。また、ネガティブなイメージが高齢者自身に浸透すると彼らの心身の健康を損なうことが分かった。他方、高齢者に対するイメージにはポジティブな側面も含まれており、そうした肯定的イメージを持つことが高齢者の健康や能力を促進することも明らかになっていた。ただし、加齢について過度にネガティブイメージを否定するよりも、加齢による変化を受容し老いと共生する姿勢が必要だという岩原の主張には説得力があると感じた。今後は、岩原の主張を実現するにはどのような手立てがありうるか、調べてみたい。

（1252 字）

引用文献

- パルモア, E (2002)『エイジズム：高齢者差別の実相と克服の展望』　鈴木研一訳　明石書店
- 岩隈美穂（2007）「障がい者、高齢者とのコミュニケーション」　伊佐雅子監修『改訂新版　多文化社会と異文化コミュニケーション』　三修社
- 岩原昭彦（2018）「サクセスフル・エイジングとオプティマル・エイジング」　日本心理会編　『心理学ワールド』　82 巻

●出題の意図

文化総合学科について関連する社会科系科目の中から自ら課題を設定し、これに関する課題レポートの提出と、それに基づいたプレゼンテーションを行なってもらい、調査する能力と発表・報告能力を確認する。